

1. はじめに

私は以前から植物に興味があり、以前私が今回調査対象とした山に行った際、軽く植物を見ながら歩いていたら、多種多様なシダ植物が生息していることに気づいた。そこで、今回その山に生息するシダ植物を調査することにした。シダ植物の一部には、園芸用に採取される種などが存在することを踏まえ、具体的な調査地は公表しない。

2. シダ植物について

シダ植物とは、維管束を持つ植物のうち、孢子生殖を行う植物の総称であり、草本の種と木本の種が存在している。また、冬でも枯れずに緑色のままである常緑の種が多い。

シダ植物は少なくともシルル紀には出現しており、クックソニアはその代表例である。デボン紀にはヒカゲノカズラ綱に属するプロトレピドデンドロンや木本であるアーケオプテリスなどが出現し、石炭紀にはヒカゲノカズラ綱のレピドデンドロン(リンボク)やトクサ綱トクサ目に属するカラミテス(ロボク)が繁栄し、大森林を形成した。古期造山帯で産出される石炭はこの石炭紀からペルム紀にかけて繁栄したシダ植物の化石である。

また、種子植物はデボン紀に分岐した。

3. 調査手法

調査対象とした山の山道及びその付近を流れていた川の周辺において、発見したシダ植物の大まかな外観、葉の表側と葉の裏側の拡大写真を撮影し、調査から帰還した後同定した。調査は種子植物がまだあまり生えておらず、常緑のものが多いシダ植物を調査しやすい初春に行った。

4. 調査結果

分類及び学名については海老原淳氏著の日本産シダ植物標準図鑑Ⅰ、日本産シダ植物標準図鑑Ⅱのものに準拠した。詳しく同定できなかったものについては、同定できた最も下位の分類群を示す。シダ植物に関する知識の不足により、同定に必要な形質などを把握していなかったこともあり、誤同定の可能性も高い。

(1) オオバノイノモトソウ

オオバノイノモトソウ(*Pteris cretica*)はイノモトソウ科イノモトソウ属(*Pteris*)に属するシダ植物である。今回の調査では、山道の谷側などに多く見られた。今回の調査で最も多く見かけた種の 1 つである。

(2) チャセンシダ科チャセンシダ属の一種

チャセンシダ科チャセンシダ属 (*Asplenium*)のコバノヒノキシダまたはトキワトラノオなどその近縁種だと思われる。山道の谷側の比較の日当たりのいいところに見られた。今回の調査では1か所のみで確認できた。

(3) ヤブソテツ

ヤブソテツ (*Cyrtonium fortunei*)はオシダ科ヤブソテツ属 (*Cyrtonium*)に分類されるシダ植物である。今回の調査ではオオバノイノモトソウと並んで多く見られた種である。こちらも山道の谷側などで多く見られた。

(4) オシダ科ヤブソテツ属の一種

オシダ科ヤブソテツ属 (*Cyrtonium*)の一種だと思われる。羽片の幅が広いヤブソテツのような見た目をしており、若干色が暗く、光沢があった。しかし、全くの見当違いである可能性がある。山道の山側の1か所で確認できた。

(5) オシダ科イノデ属の一種

オシダ科イノデ属 (*Polystichum*)の一種。葉軸は赤褐色の鱗片で覆われていた。また、葉の裏側には円形の胞子嚢群がついていた。川沿いにて1か所で確認できた。

(6) オシダ科イノデ属の一種

オシダ科イノデ属 (*Polystichum*)の一種。こちらも葉軸は赤褐色の鱗片で覆われていて、葉の裏側には円形の胞子嚢群がついていた。川沿いにて1か所で確認した。(5)に比べて小羽片の先がとがっている。

(7) コシダ

コシダ (*Dicranopteris linearis*)はウラボシ科コシダ属 (*Dicranopteris*)に分類されるシダ植物である。今回の調査では山道の山側にて1か所で確認した。

(8) イワデンダ科イワデンダ属の一種

イワデンダ科イワデンダ属 (*Woodsia*)の一種だと思われる。葉軸や葉身に細かい毛が生えていた。山道の谷側にて1か所で確認した。

(9) 同定できなかったもの

以下のシダ植物は私の力量が及ばず、同定がかなわなかったものである。色については、日本産シダ植物標準図鑑での名称には従わず、一般的にその色名が指す色を指すが、日の当たり方などによって実際とは少し違う可能性がある。

① 川沿いの苔が生えているような湿った場所で確認された。小型のシダで単回羽状、葉脈の小脈は分岐していた。羽片の形状はチャセンシダ科チャセンシダ属(*Asplenium*)のものに似ているように見えるので、まだ小さいチャセンシダ属のシダ植物かもしれない。

② 山道の傍の日当たりの良い場所で見られた。中型のシダで、葉は2回羽状で、全体の形状が三角形型だった。写真の撮影に失敗していたため、葉脈については確認できなかった。葉の色は黄緑色、葉軸や羽片の中軸の色は深緑色だった。

③ 川沿いで見られた。中型のシダで2回羽状、鋸歯が発達し、全体の形状は披針型、葉脈の小脈は分岐していた。葉の色は暗めの緑色で、葉軸羽片の中軸の色はさらに暗い深緑色だった。

④ 川沿いで見られた。中型のシダで2回羽状、鋸歯が発達し、全体の形状は卵型、葉脈の小脈は分岐していた。葉の色、葉軸や羽片の中軸の色はともに緑色だった。

⑤ 山道の傍の日当たりがよい場所で見られた。中型のシダで2回羽状、鋸歯が発達し、全体の形状は卵型、葉脈の小脈は分岐していた。葉の色は黄緑色、葉軸は灰色がかった黄緑色、羽片の中軸は緑がかった褐色だった。

⑥ 山道の傍の日当たりがよい場所で見られた。中型のシダで2回羽状、全体の形状は三角形型、葉脈の小脈は分岐していた。羽片の中軸の周辺は明るい黄緑色、葉の辺縁は少し黄色がかった緑色だった。葉軸は灰色がかった黄緑色、羽片の中軸は黒褐色だった。

(11) 写真



(1) オオバノイノモトソウ



(2) チャセンシダ科チャセンシダ属
の一種



(3) ヤブソテツ



(4) オシダ科ヤブソテツ属
の一種



(5) オシダ科イノデ属
の一種



(6) オシダ科イノデ属
の一種



(7) コシダ



(8) イワデンダ科イワデンダ属
の一種



(9) ①



(9) ②



(9) ③



(9) ④



(9) ⑤



(9) ⑥

5. まとめ

今回の調査ではおそらく 14 種のシダ植物が確認できた。見落としも存在するはずなので調査対象とした山にはさらに多くの種が生息しているであろう。今回の調査時にも、山の斜面に生えていて写真を撮ることがかなわなかった種が存在し、シダ植物だと気づかなかったコケシノブ科のシダ植物も存在するだろう。また、私の知識の不足により不確実、不鮮明な同定となってしまった点があるので、もう 1 度調査するならばもう少しシダ植物について知識をつけ、その場で同定に必要な形質を確認できるようにしようと思う。今回は同定できなかった種が多かったため、来年もまた調査するかもしれない。最後に、ここまで拙い文章を読んでいただいたことに感謝の意を示させていただきます。

6. 参考文献

海老原淳 日本産シダ植物標準図鑑Ⅰ 学研

海老原淳 日本産シダ植物標準図鑑Ⅱ 学研

北川淑子 林将之 シダハンドブック 文一総合出版

小学館の図鑑 NEO 大むかしの生物 小学館

植物和名一学名インデックス YList: 分類体系表示

http://ylist.info/ylist_fam_list.php?pass=1(最終閲覧 2021 年 3 月 31 日)